



奥多摩の花100選「夏の花」より

画：安藤修二

～ 季節 だより ～

奥多摩の花100選「夏の花」

夏の花といってもカレンダー通りに咲くわけでは
ありません。初夏の5月後半から、おおむね6～8月
頃咲く花を夏の花としました。

早い時期には、白い花、本格的に暑くなると涼し
げな薄紫～青系の花が見られます。

白い花では、オオバアサガラ、ウリノキ、エゴノキ、
オトコヨウゾメ、ナツツバキ、マタタビ、テイカカズラ
等の樹木が目につきます。

新緑の山中で見るオオバアサガラの白い花が群
れて咲く様子は見事です。ウリノキとは面白い名前
ですが、瓜の木と書けば、ある程度想像がつくで
しょう。葉の形が語源です。

意外と知られていないのは、マタタビの花。葉の
陰に隠れて目立ちませんが、葉を白変することによ
り虫の目を捕らえる魔術師だということです。

薄紫～青系の花では、ホタルブクロやコアジサイ
が前半に咲き、レンゲショウマ、イワタバコ、イワギ
ボウシ、オオバギボウシ、タマアジサイ等が盛夏を
彩ります。

ホタルブクロはまさにホタルが飛び交う時期に
花を咲かせます。山地ではヤマホタルブクロが一般
的ですが、ここでは区別しませんでした。

奥多摩山中で見るコアジサイは装飾花がなく
ても美しい。やや青みがかったものと白っぽいもの
があります。ちなみに、園芸種でオクタマコアジサイ
という種類があり、商業ベースに乗っています。

レンゲショウマは、奥多摩の夏を代表する花のひ
とつですが、タマアジサイやフシグロセンノウの花
も見どころがあります。タマアジサイは、多摩川上
流の沢筋の花。フシグロセンノウは盆花ともいわれ、
獅子舞の飾り花として使う地域もあります。

その他、夏の花で奥多摩の花100選に入ったもの
は、下記のとおりです。

イチヤクソウ、ウバコリ、オカトラノオ、ギンバイソウ、
ギンリョウソウ、クサギ、サラシナショウマ、シラネセ
ンキュウ、ソバナ、タマガワホトギス、ツリガネニン
ジン、ツリフネソウ、ツルニンジン、ニッコウキスゲ、
ハンショウズル、マルバダケブキ、ミゾソバ、ヤマト
リカブト、ヤマコリ、ユキノシタ。

(岡崎 学)

～ 赤 さ っ せ え ～

丹三郎尾根から御岳山

～レンゲショウマを訪ねて～

コース:古里～御岳山～鳩ノ巣

開催日:8月4日(木)

花茎を長く伸ばした先に、ピンクの花をうつむきかげんに咲かせるレンゲショウマは日本だけに分布し、その姿は愛らしく、見る人を魅了します。

今回訪ねるのは、御岳山の富士峰園地。日本一の自生地といわれています。ケーブルカーでも手軽に見に行けますが、古里からの丹三郎尾根を2時間半ほどかけて登ります。

スタートは古里駅。10分ほどの車道歩きの後、獣害対策の扉がある登山道に入ります。しばらくはスギやヒノキの針葉樹林帯が続きます。数々の野の花や小鳥の声を楽しみつつ、ひたすら登って行きます。まもなく大きな杉の木「飯盛杉」が現れます。

この先からは、尾根道で、広葉樹が多くなります。パイカツツジの花が残っていたら、ラッキーです。

やや急登もありますが、まもなく分岐が現れ、大塚

山(920m)への登りになります。

巻き道もありますが、三角点のある山頂で、眺望も楽しみたいものです。山頂ではヤマユリ、オオバギボウシ、オカトラノオなどが出迎えてくれるでしょう。

さらに進むとレンゲショウマ群生地に着きます。道を外れないように、ゆっくりと歩き、神秘的とも言えるレンゲショウマをお楽しみください。この斜面にはその他に、トチバニンジン、チダケサシなども見られます。斜面の上方は園地で、テーブルやベンチもあり昼食場所にも適しています。

十分楽しんだら、鳩ノ巣駅へと下ります。

大塚峠までの道には、クサアジサイ、タマアジサイ、ヤマアジサイが多く見られます。キツリフネやギンバイソウも咲いていることでしょう。滑りやすいところもありますので足元に気をつけて、慎重に下山しましょう。

松ノ木尾根を過ぎると、ゴールの鳩ノ巣駅はすぐそこです。

(中村 美智江)

～ 行 っ て 赤 た め ん ～

雪の鷲冠山を訪ねて

2月28日、「終日、雨」との天気予報にめげず、23人が集まりました。

柳沢峠にある甲州市の市営駐車場のトイレでスパッツやアイゼンを装着して、降り止まぬ雨の中、雪道に足を踏み出しました。登山道は既に多くの登山者が通ったようで、アイゼンが小気味よく踏み固められた雪に食い込んでいきます。

しばらく歩くうちに、雨は上がりました。「このまま上がるかな?」と、期待をこめつつ先を急ぎます。最初の落葉広葉樹林の道では、晴れていれば、落葉期の今は、多摩川と荒川の分水嶺や、富士川(笛吹川)と荒川との分水嶺の山々が木の間越しに見えるのですが、今回はそれも望めません。

横手山峠辺りから空から何かが落ちてきました。アラシでした。「雨よりはマシかな」と思いつつ、本日一番の急登に取り付きました。急登とは言え、奥多摩のそれと比較したら何てことない登り坂です。しかし、緩やかな道に慣れていた身体にはこたえます。

三角点のあるピークを横に見て、まず本日の最高地点である岩場(1,716m、ここを黒川山とする説もある)に行きました。展望台と名づけられたこの場所は、晴天なら300度以上の眺望を楽しめます。

三角点がある場所まで戻り、降りしきる雪の中、昼食としました。余りの寒さに、食休みもそこそこ山頂を出発しました。天候が良ければ鷲冠神社がある岩峰まで行く予定でしたが、それを諦め、黒川山の北側を巻いて、今回のコース中では最も積雪量の多い道を下り始めました。

その頃から雪の降り方は激しさを増してきましたが、ラッセルの必要もなかったこともあり、「雪山を歩きたい」との希望で参加した人たちには、むしろ感動の連続だったようです。

横手山峠からの道と合流した後は、それまでの針葉樹林とグッと趣きを変えた広葉樹林の中を、一路、バスが待つ青梅街道を目指し下りました。

歩き始めの雨などを忘れたように、帰路の車中では、「満足」との声が沢山聞かれました。でも、来年は好天の中を歩きたいものです。(堀越弘司)

～ 奥多摩「山岳救助隊日誌」抄 その20 ～

「御前山の行方不明2題」

奥多摩三山と呼ばれている山の一つ御前山は、他の二つ大岳山、三頭山などに比べれば女性的山といえるかもしれない。御前山という山名の謂われは、大ダワを挟んで東に対峙する男体の大嶽に対する、御前は姫御前の意味であるとする説や、御前は御膳で、神供する飯を盛るかたちをなしているからなどの説があるが、いずれにしてもたおやかな山をイメージできる。そして4月ともなれば、春の妖精などとも呼ばれているカタクリの花が咲きそろう東京一の群生地なのだ。普段はそんなに人気のある山ともいえないうが、そのカタクリの時期になると、日曜祝日などには1日数百人もの登山者で賑わうことさえある。

御前山に1度でも登ったことのある人なら、この山での道迷い遭難など考えられないだろう。しかし御前山での救助要請はけっこう多いのだ。北側には都民の森「体験の森」などが整備され、そんなに複雑な登山道などもない。しかし、初心者で勉強不足の人や、山のリスクを全く把握できていない人などが、観光の延長で山に入り、そして「足が痛くて歩けない」だとか「日が暮れて暗くなり道がわからない」などの情けない救助要請や、「御前山避難小屋に布団や緊急時の電話がない」など見当はずれの苦情を言ってくる登山者が多いのだ。

10月14日、神奈川県にあるSという山岳会から、青梅署山岳救助隊あてにファックスが届いた。御前山に登って下山しない会員の搜索を依頼するものであった。

行方不明となっている男性Mさん(70歳)は、山の経験は豊富であるが数年前脳梗塞を患っており、そのリハビリを兼ね9月29日から10月8日までの予定で御前山、三頭山などを散策するために入山していたものであった。

体が少し不自由なため、大きな荷物を御前山避難小屋まで知人に運んでもらい、そこを拠点として付近を散策したり、三頭山あたりまで足をのびしたり、氷川に下り温泉に入り食料を仕入れたりしながら10日間を過ごそうとしていたものであった。しかし予定の10月8日になってもMさんは帰宅しないため、家人が所属するS山岳会に相談した。山岳会員が御前山に登り御前山避難小屋を確認したところ、小屋には数日分の食料が入ったザックがあり、食べかけのカレーが残っ

ていたが、近くに本人の姿はなかったため五日市側で下山し、五日市警察署に届け出たものであった。

御岳山から大岳山、鋸山、御前山、月夜見山、三頭山と西に延びる尾根の稜線の南側が五日市警察署管内であり、稜線の北側、即ち多摩川側が青梅警察署の管内である。

先に搜索願を受けた五日市警察署の山岳救助隊が、昨日から御前山付近を独自に搜索活動を行っていたことは無線などで知ってはいた。Mさんが拠点としていた御前山避難小屋は青梅警察署管内であることから、当然搜索に入らなければならないだろう。ただ青梅署山岳救助隊は今、日原小川谷で行方不明になっている男性の搜索活動中で、こちらはまだ日にちも浅く生存の可能性が大きいことから優先的に搜索しなければならないと考えていた。

Mさんの所属する山岳会の人や、山岳救助隊本部となっている奥多摩交番を訪れ、Mさんの搜索を依頼してきた。応対した高田副隊長は、今実施している小川谷搜索の件を山岳会メンバーに説明し、Mさんの搜索にも入るが大人数は出せないことを理解してもらった。

Mさんの大きなザックやシュラフは避難小屋に置いてあり、サブザックとヘッドランプ、ストックが無くなっていることから、買い出しが温泉にでも行くため、氷川に下りる途中、迷ったか転落でもしたのではないかと思われた。

五日市署山岳救助隊は航空隊にヘリを要請して飛ばしたり警備犬を投入したりしていたし、S山岳会の人たちも大勢入山して搜索をしていたから、主要登山道の搜索は終了しているはずであった。当署の山岳救助隊は少人数ながら、沢や登山道の無い尾根筋の搜索を行った。私もあまり人の入らないシダクラ尾根や九竜山、栃寄沢あたりに入って探した。しかしリハビリ登山の人が、意識的にそのようなバリエーションルートに入り込むことは考えられなかった。

日原小川谷の行方不明者搜索も片づいたので、10月15日から4日間、大人数を出し集中してMさんの搜索に費やしたが発見できなかった。行方不明になってからすでに長期間経過しており、当署山岳救助隊は情報待ちということで一旦大掛かりな搜索は打ち切った。五日市署はその後も何日か探したようだが発見できず、搜索を打ち切ったようであった。

2ヶ月経つが何の情報もなかった。山岳救助隊としての捜索は一旦打ち切っているのに、若手の隊員などは自分の週休で御前山に入り、気になっている沢などを探したりもしていた。しかし何の手掛かりも得られていない。

11月28日、またしても御前山で行方不明者が出た。Mさんが行方不明になって丁度2ヶ月後である。今度は都内K区在住のAさん(76歳)が、前日の27日、奥さんに「奥多摩の御前山に登ってくる」と言い置き、午前4時50分ころ一人で自宅を出たまま、夜になっても戻らないと、日にちが替わった28日の午前1時30分に、息子さんから電話で青梅警察署に届け出があったものである。

朝になって、奥さんに奥多摩交番へ来てもらい、奥多摩駅をお願いして、駅に設置してあるモニターを見させてもらったところ、Aさんは27日の午前7時17分着の電車から降り、奥多摩駅の改札を出たことが確認された。

奥多摩駅に置いてある、登山計画書提出箱の登山届けを佐藤隊員が確認したが、Aさんのカードは無かった。ただ同じ日に御前山に登った人のカードが2枚ほど入っていたので、その人たちに電話を掛け、Aさんらしい人を見かけなかったかを聞いた。すると御前山に登り、山頂で昼食後、境橋に下山した兄弟の男性から、それらしい登山者とすれ違ったとの情報が得られた。兄弟は避難小屋のだいぶ下でAさんと思われる登山者に「頂上はまだですか」と声を掛けられたという。午後1時ころで、相当疲れている様子だったという。

境橋の登山口を8時に登りだしたとして、3時間程度のコースを、5時間かかってまだ避難小屋にも着いていないということだ。相当体調が悪かったことが考えられる。すぐ3個班を投入し各登山コースの綿密な捜索に入った。

ところがである。惣岳山から大ブナ尾根を下り、サス沢山手前から北に派生しシダクラ橋に出る、サス沢とシダクラ沢の中間尾根を下った佐藤、市川班が9月29日から不明になっていたMさんの所持品らしき物を発見したのである。サス沢の源頭付近で最も痩せ細った尾根を通過していた市川隊員が、シダクラ沢支流側斜面の10メートルほど下に小さなザックのような物があるのを発見、下に降りてみるとサブザックで、近くにストックも1本落ちていた。佐藤、市川両隊員がなおも捜索するが、それ以上の発見はなく、タイムリミットで下山した。

翌29日、Aさんと昨日遺留品が発見になったMさんの捜索も兼ね、3個班体制で入山。サブザックはMさん本人の物であることを奥さんが確認した。遺留品のあったシダクラ沢の支流側斜面を中心にシダクラ沢本流まで綿密に探した。S山岳会の人たちも捜索に加わったが、夕方まで何の発見もなかった。

翌30日、Mさんの遺留品があった反対側斜面、サス沢源頭の急な斜面を約250メートルほど降りたルンゼの中で、渡辺隊員がMさん名義のカードやヤッケなどを発見したという。しかし日没となり危険な現場であるため、捜索は明日に持ち越し引き上げた。他のAさん捜索の班も手掛かりは発見できなかった。

翌12月1日、Mさんはサス沢上流にいるものと判断し、高田副隊長以下救助隊員4名と刑事課員が収容に入り、他の3個班はAさんの捜索に回った。私は藤田隊員と栃寄沢右岸尾根を登り、鞆口山から九竜山に入って奥多摩病院裏までの尾根を捜索した。途中Mさんの捜索班から無線が入り、稜線から約300メートル下のサス沢に注ぐルンゼ内で登山靴、スパッツ、白骨化したMさんのものと思われる頭蓋骨などの骨を収容したと連絡があった。

Mさんは大ブナ尾根を小河内ダムに下ろうとして、サス沢山手前で北方に派生するサス沢とシダクラ沢に挟まれた尾根に迷い込んだのだ。それにしてもシダクラ側斜面に荷物が落ちていて、本人は反対のサス沢側に300メートルも転落しているとはどういうことだろう。転落1度は尾根に這い上がり、次に反対のサス沢側に転落したものなのだろうか。

次の日から2日間、Aさんに対する捜索を集中して続けたが、手掛かりすら発見できなかった。山岳救助隊としては以後、通常勤務を通じての捜索として大掛かりな捜索は一旦打ち切ることとし、情報待ちとなった。

Aさんは避難小屋付近で相当疲れた姿を目撃されているのだから、時間的にも山頂からそう遠い所に下山する訳はない。

暮れから何度か降った雪で御前山も白くなり、Aさんはとうとう未発見のまま年を越してしまった。3月、杉花粉も飛びはじめたのだが、まだ北側に雪が残っている。草木が萌えると回りの見通しが利かなくなる。カタクリが咲く頃までに何とか発見してやりたいものである。

遭難のむくろ負^{このはずく}い来て木葉木菟

(青梅警察署囑託員 山岳指導員 金 邦夫)

奥多摩昔語り

奥多摩の地名(22)

小河内(おごうち)の「河内」は、「カワチ」とは呼ばずに、「コウチ」と発音します。河内とは、周囲に水をめぐらしたところとか、山間の平地のことをいうと奥多摩町誌にあります。河内も多摩川と峰谷川に囲まれた地形でした。

小河内温泉鶴の湯のある「湯場」を過ぎて「そうざす」の坂を下り、峰谷川に架かる小川橋を渡ると河内の集落となります。ダムに水没する前、ここは、村の中心地で、役場、小、中学校、郵便局などがあり、集落の入口に普門寺が、奥よりには金御嶽神社がありました。普門寺は、鎌倉建長寺第37世の物外可什和尚が開山といわれ、また足利尊氏が貞和年中(1345~1350)に開基したとも伝えられている古刹です。現在は、「留浦」の「雲風ろう」(くもぶろ)地内に移建され、寛政年間(1789~1801)に再営された楼門は、町指定有形文化財です。

金御嶽神社は、旧金御嶽蔵王権現といい、東京都指定有形文化財「木造蔵王権現立像」他、平安期の作と見られる多数の木像を有していました。現在は、小河内地域の各社とともに、小河内神社に合祀されて

います。

河内平には、四十二塚という塚があり、四十二という家号もありました。

「往古、檜大将橘高安という人の頃、山の狢を生業(なりわい)とする兄弟が「ののたわ」の杣小屋に寝ていると「大将様のお呼びなるぞ、早々に帰るべし」という彼等の母親の声荒く呼ぶのが聞こえました。夜中のことゆえ「さては、もののけの仕業か」と弓矢を取って飛び出すと、いかにも恐ろしげな山姥が「あたま」の上の山から呼ばわっているのが見えます。二人は耳打ちして同時に矢を放つと、くだんの妖怪は「あたま」の集落までころがって来て、あい果てました。その後、妖怪の怨霊が祟って村人に禍を及ぼしたので、巫女に伺わせると「四十二の塚を築いて祀り込めば怨霊残るまじ」というご託宣でした。村人は総出で村内の所々に塚を築いて行き、いよいよ日が暮れる頃、「まじまじ墓」に「まんじ塚」を築き、最後に築いたのが、四十二に分けた最後の骨を祀り込んだ「四十二塚」でした。」この話にまつわる塚跡や宝篋印塔などが、熱海や原、湯場、河内にありました。

【資料】奥多摩町誌、広報おくたま、小河内貯水池郷土小誌 (岡部義重)

奥多摩歳時記

奥多摩のチョウ

スーッと目の前を何かが飛んだ。あっ、チョウだ。登山道で、こんな光景に出会うことがあります。今回は、奥多摩・夏のチョウ入門編です。

オオムラサキ

街中では、ほとんど見かけなくなりましたが、日本を代表するチョウで国蝶。国蝶選定の折、アサギマダラやキベリタテハも候補だったそうです。幼虫はエノキの葉を食べ、7月頃から姿を見せます。

アサギマダラ

悠然と空を飛ぶ姿は、やさしく優雅。ところが、この小さな身体に1500kmも飛ぶ力を持っているとは想像もつきません。名前のとおり浅葱色の大きな翅は、実に印象深い。高尾山ではキジョラン、奥多摩ではイケマやカモメツルを食草としています。いずれもガガイモ科で毒性の強いアルカロイドを含み、彼らはこの毒を逆手にとって体内に取り込み、外敵から身を守っています。山で白い布をぐるぐる回すと近くに寄ってくるとか。一度

試してみてもいいかがでしょうか。

キベリタテハ

翅の縁にクリーム色の縁取りがあるので黄縁のあるタテハチョウという意味です。縁取りに沿って点々と並ぶ青い目印が美しい。このチョウの出番は、8月。日原の鍾乳洞付近の林道がオススメ。

外来のチョウたち

今までに奥多摩では確認されていないアカボシゴマダラを2010年の夏に登計のセラピーロードで発見。亜熱帯蝶のツマグロヒョウモンが奥多摩でも越冬するようになって数年後、今度はアカボシゴマダラが飛来。南西



アサギマダラ

諸島のチョウといわれていますが、これは、人為的に持ち込まれた中国産とか。鳥のガビチョウ同様招かれざる遠来の客です。

(岡崎 学)

ガイドだより

～新緑の奥多摩湖右岸を歩く～
(いこいの道)

《下見 (5月13日)》

下見の時にビックリ、湖に水がない。小河内貯水池管理事務所に聞いたら、これでも48.8%あるとのことだったが、まるで信じられない。剥き出しの急斜面を見るとゾクッとす。大震災による原発事故によって、利根川水系の水道水が放射能の影響を受けたために、急遽、奥多摩湖の水を求められたと聞いた。一日も早く、いつもの美しい湖に戻ってほしい。

困ったことに奥多摩湖の水位が異常に下がっていたために、麦山と小河内神社バス停下を結ぶ浮橋が使えない。いつもは、この浮橋を渡って帰っていたのだが。まさに、ハシゴ(ハシ)を外されてしまったのだ。

帰るためには、上流の深山橋バス停へ行くより方法がない。山のふるさと村から浮橋への道を30分ほどのところにある三頭山への登山道を左へ2～3分登ると周遊道路に出る。そこから右に行き、山のふるさと村から1時間20分でバス停に着いた。

奥多摩湖の水が少なくなっていることを除けば、道も危険なくOKだった。特に、山のふるさと村と浮橋のあいだの、触れなば倒れる風情の柵が新品になり、道も整備されていた。前から危険を指摘していた場所なのでよかった。ただ、1箇所、倒木により道に穴があき、新品の柵がゆがんでいた。

《本番 (5月19日)》

抜けるような青空の最高の天気である。8時40分のバスで奥多摩湖へ。参加者は、男女5名ずつの10名、ガイド3名の計13名。奥多摩湖で顔合わせ、受付、準備体操を行い出発。

少人数のせい、最初の遅れも順調に取りもどして、11時には中間地点に着いた。早めの昼食にする。

13時30分、山のふるさと村に着いた。休みがてら皆さんの感想や意見を出していただいた。

14時10分に出発。途中の周遊道路に出た所の工事現場で事故があり、消防、警察のヘリが上空で待機するなか、大勢の救助隊員が負傷者を収容しようとしていた。

深山橋バス停発16時7分のバスで帰途についた。
(浅田勝久)



施設案内

山のふるさと村 コーヒー・軽食
『やませみ』

山のふるさと村は、都民から「山ふる」の愛称で親しまれている自然公園です。

その中にレストラン「やませみ」があります。特に奥多摩やまめを使用した『奥多摩やまめフライ定食』をお薦めします。食欲をそそります。価格は950円です。奥多摩やまめの刺身定食もあります。

お問い合わせ 0428-86-2552

西多摩郡奥多摩町川野 1740 番地

イベント案内

奥多摩町と観光協会では、初夏から秋に向けてイベントを用意しております。「名人・達人観光ガイドの会」のガイドがご案内します。

希望者は、往復はがきに参加したいイベント名・住所・氏名・年齢・電話番号(2名様まで)を明記の上、奥多摩観光協会へ。(抽選の場合あり)

① 8月4日(木) 丹三郎からレンゲショウマを訪ねる

応募締切日 7月18日(登山)

② 8月17日(水) 夏休み親子体験教室
釣り、カヌー体験

応募締切日 8月3日(ハイキング)

③ 8月26日(金) 倉沢の檜と滝を楽しむ

応募締切日 8月15日(ハイキング)

④ 9月8日(木) 越沢溪谷の巨樹を訪ねる

応募締切日 8月20日(ハイキング)

⑤ 9月22日(木) 水根口から六ツ石山に登ろう

応募締切日 9月10日(登山(健脚))

⑥ 10月5日(水) 関東ふれあいの道

棒ノ折山～名坂峠～北川橋

応募締切日 9月20日(登山)

募集人員：各回30名

参加費：700円、②は別途料金

次号は、平成23年10月15日に発行します。

発行：奥多摩観光協会

住所 〒198-0212 奥多摩町 氷川 210

電話 0428-83-2152 Fax 0428-83-2789

編集：名人・達人観光ガイドの会